2006年10月26日

滋賀県余呉町12月議会提出、高レベル処分場に「応募しないことを求める署名」のお願い

放射能のゴミはいらない！市民ネット・岐阜
くらし　しぜん　いのち　岐阜県民ネットワーク

今年9月20日、滋賀県余呉町長が高レベル放射性廃棄物（ガラス固化体）処分場を誘致したいと再度表明しました。町長は昨年10月、高レベル放射性廃棄物処分場の誘致を検討したが、滋賀県知事の了解が得られなかったとして、断念を表明しました。

しかしその後も町長は財政が逼迫を処分場に関わる交付金で立て直そうと、資源エネルギー庁に処分場に関わる交付金増額を求めたり、六ヶ所村のガラス固化体貯蔵施設を視察したり、ＮＵＭＯ（処分実施主体・原子力発電環境整備機構）にガラス固化体処分の話を聞くなどして、再度、誘致検討を表明しました。

勿論滋賀県知事、岐阜県知事は検討に懸念を表明しています。

滋賀県余呉町は岐阜県揖斐川町に隣接した町で、岐阜県民や東海地域の人達と深い関わりを持っています。ところが余呉町長の応募問題は東海地域ではほとんど報道されておらず、ご存じないかもしれません。チラシの記事をご覧ください。

さらに町長によるＮＵＭＯ、資源エネルギー庁を交えた住民説明会が10月20日開始されました。10月20日の説明会で町長は、文献調査への応募を議会に提案すると語ったと伝えられています。10月23日には町議会議員6名が六ヶ所村を訪れ核燃の村の状況を見聞しました。参加した三國宏議長は、「町の財政状況を考えれば、誘致を選択肢の一つとして考えていかなければならない」と語ったと東奥日報が報道しました。態度を表明しなかった議員も次第に誘致へと傾いています。

私たちは、ガラス固化体地下処分のための研究施設・超深地層研究所が瑞浪市で建設されつつあり、周辺の地下データが 40 年以上にわたって蓄積されてきた東濃地域に最終的に処分場が押しつけられる可能性が高いと考え、研究所の建設に反対しています。

同時に高レベル放射性廃棄物の持つ超長期に及ぶ危険性から、今回のように隣接した他県自治体の処分場誘致検討にも危惧を抱いてます。

＜心配する主な理由＞

・高レベル放射性廃棄物地下処分技術の研究は始まったばかりで安全性は確立していない。
・地震国日本の地下の亀裂は無数で、亀裂を流れる地下水の流れは現状では把握できない。
・予定通り処分が始まってもガラス固化体の表面温度が 100℃以下にならず、人工バリア（ベントナイト）が変質し、機能しない可能性あり。
・酸素の少ない地下深部にも微生物が存在し、微生物の調査は未着手。
・強い放射線と高温に曝されているガラスは亀裂を生じ、地下水が触れた場合、放射能を溶かし出す。

等危険性が指摘されています。
チラシとあわせてご覧下さい。

しかも、余呉町長は12月議会に応募の提案をすると語っています。このような状況から余呉町議会に別紙の署名を提出し、応募しないよう求めます。

署名の主旨をご検討いただき、署名を期限内（2006年11月25日（土））に、兼松まで届けていただきますようお願いします。

兼松の住所　〒502-0328　岐阜市光栄町1-1-2-402　　電話&FAX　058-232-2073

以上